

祇園精舎 (平家物語の一節)

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響あり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰の理を現す

驕れる者久しからず

ただ春の夜の夢の如し

猛き人も遂には滅びぬ

偏に風の前の塵に同じ

【備考】現代語訳

祇園精舎の鐘の音には、諸行無常すなわちこの世のすべての現象は絶えず変化していくものだという響きがある。沙羅双樹の花の色は、どんなに勢いが盛んな者も必ず衰えるものであるという道理をあらわしている。世に栄え得意になっっている者も、その栄えはずっとは続かず、春の夜の夢のようである。勢い盛んではげしい者も、結局は滅び去り、まるで風に吹き飛ばされる塵と同じようである。

遠い外国の例を見ると、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱忌、唐の安祿山、これらはみな元の君主や先代皇帝の政治に従わず、栄華の楽しみを極め、忠告にも深く考えようとはせず、天下が乱れることもわからずに、人々の苦勞するところとなるものも知らなかったので、長続きせずに滅びた者たちである。

身近な日本の例を見ると、承平の平将門、天慶の藤原純友、康和の源義親、平治の藤原信頼、これらの人は得意になる心も猛々しい心も、みなそれぞれ持っていたが、最近では六波羅の入道、前太政大臣平朝臣清盛公と申した人の様子は伝え聞いても想像することも形容することもできないほどである。

その清盛の先祖を調べると、桓武天皇の第五皇子、一品式部卿葛原親王から数えて九代目の子孫、讃岐守正盛の孫で、刑部卿忠盛の嫡男である。葛原親王の御子、高見王は、官職も官位もいままなくなられた。その御子の高望王のとき、初めて平の姓を賜わって、上総介になられてから、ただちに皇籍を離れて臣下の列に連なる。その子・鎮守府將軍良望は、後には国香と名を改めた国香から正盛に至るまでの六代は、諸国の国守ではあったが、殿上人として昇殿することは、まだ許されなかった。